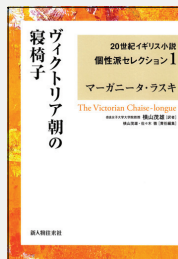


マーガニータ・ラスキ 作  
横山茂雄 訳

### 『ヴィクトリア朝の寝椅子』

(「20世紀イギリス小説個性派セレクション」1)



1950年代のイギリス。弁護士の子を持つメラニー・ラングドンは、妊娠と同時に結核が見つかり、一時は出産そのものが危ぶまれたが、医師の助力もあってことなきをえた。だが、出産後は結核の治療に専念しなければならず、我が子と会うことさえままならない。経過が良好だったため、メラニーは寝室から居間へ移り、出産前に購入したヴィクトリア朝の寝椅子に横たわる。きっとこれからは体調も良くなり、子どもとも触れあえる。彼女はやってくるはずの幸せを確信しながら、眠りに落ちた。だが、目が覚めたとき、彼女は愕然とする。見慣れぬ暗い部屋、嫌な匂い、奇妙な服装の見知らぬ人々。もっともメラニーはおなじ寝椅子に横たわっていた。ただし、1864年に結核を患って死にかけているミリー・ペインズとして。

1953年に発表されたマーガニータ・ラスキの『ヴィクトリア朝の寝椅子』は、一見するところ時空を超えるタイムトラベ

ル小説の様相を呈している。しかしこの物語の不気味さは、他のタイムトラベル作品——たとえばほぼ同時期に執筆されたフィリパ・ピアスの『トムは真夜中の庭で』など——において、登場人物が自己を保持したまま時空を移動する物語が持つ確かな足場が、まったく保証されていない点にある。メラニーの意識は、ミリーと呼ばれる女性の身体に入り込み、そこから出ることが出来ない。それどころか、彼女は寝椅子から降りることさえ出来ないのだ。メラニーは、必死で周りの人間に自分が未来からやって来たことを理解してもらおうとする。だが、その努力は報われることはない。そもそもなぜメラニーの意識はミリーの体に入り込んだのか？ メラニーの本当の体は20世紀の寝椅子に残っており、意識だけ19世紀に飛んだのか？あるいはミリーは多重人格でメラニーという人格を持っているだけなのか？それともこの物語全体がメラニーの夢なのか？読み進めるに連れて、読者は自分の解釈の変更を幾度も迫られることになる。

本作が、不気味でありながらも妖しい魅力に満ちているのは、時間を繋ぐ寝椅子が「恍惚」を生み出す装置になっているからにほかならない。意識が19世紀へと接続される直前に、メラニーはヴィクトリア朝の寝椅子の上で、いいようのない恍惚を感じながら眠りに落ちる。恍惚、それは時間を止めてしまうものであり、20世紀のメラニーと19世紀のミリーを繋ぐ物語の接点である。「恍惚は時間を超越している。……恍惚とは、全時間に存在しながら、同時に時間の中には存在しないのか？そして時間の中に戻るの単なる偶然にすぎず、時間の持続の中の一瞬とは他の一瞬と同じように真実なのか？」という印象的な一節が、物語の中盤で差し挟まれる。

この作品はまた、寝椅子の上にとどまり続ける女の物語でもある点も興味深い。メラニーもミリーもそれぞれの理由で困難を抱えた出産を経験し、さらに産まれた子どもと引き離されている。メラニーの思考が寝椅子の上で紡がれ続けるこの設定は、直接の言及はないものの、精神分析における自由連想を想起させる。そうすると本作は女性と病と狂気をめぐる物語として解釈されることも可能だろう。

発表から半世紀以上を経てなお読者を刺激する『ヴィクトリア朝の寝椅子』は、時空を越える恍惚をもたらす作品で有り続けるに違いない。(新人物往来社、2010年3月、四六判160頁、2,000円)

——大串 尚代 (慶應義塾大学准教授)